

【博士論文要旨】

法然淨土教の研究

——伝統と自証について——

坪 井 俊 映

日本の佛教は法然淨土教の出現によって、思想史の上において、また社会史の上において大きく転廻をしている。法然の存在は日本佛教思想の展開の上において、分水嶺のごとき地位をしめている。それは法然という大きな分水嶺をこえることによって、一切の夾雜物（雜行）がとり除かれて、一法一行を選取する新日本佛教が誕生したからである。

佛教の初伝以来、奈良平安の両時代に栄えた佛教は国家佛教であり、氏族の佛教であつて、民衆の佛教ではなかつた。それは出家という専門家および貴族といわれる一部の指導階層に独占された佛教であつて、学解を尊び厳しい修行によつて社会的品位を保つ佛教であつた。

法然に初まる鎌倉時代の新佛教はこの一部の指導階級に独占されていた佛教をひろく民衆に開放したのである。殊に日本淨土教の展開について論する場合、初伝以来、奈良叡山に盛えた淨土教の直線的な發展延長の上に、現今の日本淨土教が存在するのではなく、一度、法然淨土教を通過することによつて一切の夾雜物が除かれて、民衆を平等に救済する念佛一行の庶民淨土教が生れたのである。それは、かつての佛教が説いた学解や厳しい修行をもつ

て救済の条件とはせず、たゞ佛の大悲に信順して念佛するだけで、誰れでも等しく救済される浄土教である。

このように、日本佛教を大きく転廻さし、新日本佛教、日本の庶民浄土教を生む原動力となつたのが法然浄土教であるにかゝらず、これを単なる一宗派の開祖の教えに止め、また日本の庶民浄土教形成の一過渡的存在と見るもののあるに鑑み、法然浄土教の特質を「伝統と自証」なる観点より明確にせんとするのが本論の意図とするところである。

いま法然浄土教の特質をあげるならば、第一に見るべきものは、前代の佛教が當為的觀念的佛教であつたに対して、法然の浄土教は現実直証に出発する教えであるということである。

釈尊が出家求道の旅に出られた直接の動機は、現実の人間が先天的に背負っている生、老、病、死の四苦乃至は八苦の諦観にあるといわれている。そして、釈尊はその原因を無明に見出されたのである。

これと同様に法然は現実の社会騒乱とそれによる民衆の苦悩を見て、これを当時の社会思想となつていた末法思想によつて理解し、かゝる現実の悪世相に住する人間を善導の考えによつて煩惱具足の凡夫、罪惡生死の凡夫として、かゝる煩惱具足の凡夫、罪惡の凡夫を救う教えを、善導が説く本願念佛の中に見出したのである。このように現実の惡をとらえるとらえ方を現実の直証ということができる。

かゝる見方に対して、法然以前の天台真言等の説く教えは、人間の本来あるべき姿、即ち當為的人間を觀念の中にとらえて、煩惱即菩提、娑婆即寂光浄土を説く、現実肯定的な教えであつた。かゝる現実肯定的な娑婆即寂光浄土説は平安末期におこつた社会騒乱によつて根底より覆えされたのである。かゝる社会騒乱にあつて鬭争し苦しみ悩むことは現実人間の本性が煩惱的存在であり、罪惡的存在であると直証して、かゝる人間を救う教えを釈尊一代佛教の中より念佛の一行を選択して、もつて時機相應の教えとして、あらたに浄土宗なる宗派を獨立させたのが法

然である。このように法然の浄土教は現実の直証に教法組成の基本のあることを見逃すことはできない。

(二)は出家主義の佛教より民衆の佛教への転換である。

佛教が説く出家比丘の戒法は大乗小乗を問わず、佛教の専門家に課せられたものであり、在家信者の戒法もあるが一般民衆には困難なものである、まして当時の天台宗において修行する四種三昧、二十五方便はいうまでもなく、相応和尚に初まる叡山の回峯行、また密教において説く四度加行のごときは、容易に一般人の行ずることの出来ないものである。一般民衆はかゝる厳しい修行を成満し、また佛教の深い哲理を証得した聖者を崇め、これに供養し、教えを聞き、またこの聖者に修法儀式を依頼することによって、何等かの利益があると考えていたのである。しかし、在家信者の中には居士といわれる特信者があつて、かゝる修業の一部を行じた人もあるが、しかし一般のものにとつて、かゝる厳しい行は近づき難いものであつた。その修行には種々なものがあるが、持戒、菩提心、観法は最も重視されていたものである。法然はかゝる専門家のみが行ずる佛教の修行を不要なものとして、だれでも出来る念佛の一行によつて平等の救済を説き、持戒、菩提心、観法等は浄土往生にはすべて不要なものとして廃捨したのである。そして、従来、比較的軽視され、また方便のものとされていた称名念佛に対して、阿弥陀佛の本願という新しい意義と価値とを与えて、貧富貴賤の別なく平等に救済され、悟りに入ることが出来ると、説くところに、法然浄土教の第二の特質を見出すことができる。

第三は智恵の佛教より信順の佛教への転換である。

法然は「聖道門の修行は智恵をきわめて生死を離れ、浄土門は愚痴に還りて浄土に生る」というごとく、叡山奈良の佛教は修学によつて三諦円融の道理や、三界唯識の原理を諦観して、生死の世界より解脱せんとするものである。かゝる三諦円融、三界唯識の道理なるものは、佛教の深遠な哲理であつて、一般民衆には近づき難い教法であ

り、難解な教説である。日々の生活に追われ、労働にあけくれている民衆にとりては、かゝる哲理を極めることは不可能事に類するものである。

したがって一般民衆はかゝる佛教の深遠な哲理を修得した智恵者、学者に、その教法を聞き信じるに止まるのみである。一般民衆の聞法、信受に種々の形態が見られるが、法然は、これを「愚痴に還る」といって、小賢しい小智をすてゝ、佛の教法に絶対に信順する浄土教を説いたのである。即ち、聖道門の智恵の佛教に対して他力に信順する佛教を説いたのである。

かくして、現実の人間悪を直証し、佛の大悲に信順して念佛するところに、全てのものが平等に浄土往生ができる」とするところに法然の浄土教がある。

法然の後をうけた門流は、いずれも法然の自証の教説を、それぞれの観点より布衍したが、念佛の一法一行による浄土往生を説く点においては、門下の各流派は軌を一にしている。

法然より遅れて伝わった臨済禅と曹洞禅は、当時の武家社会にひろく信奉されたが、いずれも法然浄土教と同じく、末法思想に関心をもつて、現実の人間の在り方を説き、持戒修禅、只管打坐の一法一行に、佛教修行上の絶対的価値を説くのである。日蓮のごときは法然と対決することによって、自身の説く教法の特質を示さんとしているが、唱題の一行に絶対的価値を認めて、これによって、ひろく民衆に法華信仰を説くところは、法然の念佛一行往生説とその思考の形態を等しくしているということができる。

かくのごとく、鎌倉新佛教はいずれも一法一行を選取して、これに絶対的な価値を認め、觀念より一行の実践を重んじ、しかも現実の人間（機根）に関心をもつて、機と教の相應を説くことは、法然の考えと軌を一にするものであって、法然がその先駆者であり、原動力であることは見逃すことができない。

したがって法然は但に一宗派の開祖たるばかりでなく、その教えは新日本佛教、日本の庶民浄土教を生む原動力、母体であるにかゝらず、但に一宗派の祖師の教説として止めることは斯学研究者の大いに反省すべきところである。

しかのみならず、従来の日本佛教は主として、中国佛教の移入であり、その日本化である。法然の浄土教は無師独悟の佛教であつて、法然が永年に亘る求道修学によつて自証されたものである。法然に本願念佛の教旨を授けた人師は一人も存在しない。法然の永年に亘る修学と修道並びに現実に對する深い洞察が、善導の教説の中より本願念佛を発見せしめたのである。

それで、法然の自証が形成される契機となり、また肝要と思われるものを伝統的な日本浄土教の中より四点（一）『観経疏』の流伝、（二）念佛の数量信仰、（三）末法思想、（四）『往生要集』を鑑み、法然浄土教形成の先驅思想として研究し、かゝる先驅思想の上に形成された法然の自証の浄土教を八章（一）自証、（二）自証と半金色善導、（三）選択本願念佛、（四）念佛と余行、（五）信について、（六）凡夫について、（七）還愚痴の凡夫、（八）信受せる佛）に分けて論述し、その特質をあきらかにすることにつとめた。

ついで、法然の自証せる念佛に對する批判非難は既に法然の生存中におこり、現代もなお種々の批判がなされているについて、これを五章（一）善導受容の批判、（二）長西門流の批判、（三）禅宗よりの批判、（四）蓮宗よりの非難、（五）浄土宗真宗の論争）に分つて、歴史的に考察した。そして附録として、法然浄土教研究の基礎資料となる法然の語録は、ほとんど成立年代が不明であるために、現代の諸学者の研究成果を記して、今後の研究の資にせんとするものである。

以下、各編の要旨を章目にしたがって記し、研究成果を畧述することにする。

緒論

一、研究資料について

二、真筆について

三、異本について

四、今後の問題について

以上の四項目に分けて論じた。

法然の語録（著書、消息文、法語等を一括して呼ぶ）は醍醐本『法然上人伝記』一卷、『西方指南抄』三卷、『黒谷上人語燈録』十八巻として収録され、『黒谷上人語燈録』のうち『漢語燈録』には『古本漢語燈録』（恵空書）と、『新本漢語燈録』（義山校訂）があり、『和語燈録』には『元亨版和語燈録』と『正徳版和語燈録』（義山校訂）がある。

現在、『浄土宗全書』所収のものおよび黒田、望月共編の『法然上人全集』は義山校訂の『新本漢語燈録』、『正徳版和語燈録』を収め、石井教道編の『法然上人全集』は醍醐本『法然上人伝記』、『西方指南抄』、その他金沢文庫蔵本等の古写本を底本として、その他の異本をもつて校合してあり、法然の語録の古い形態を知ることができる。しかし、法然は智慧のすぐれた念佛行者であるが、大部の著書は述作されていない。語録のほとんどは門人の記録である。法然の真筆がわづか四点しか現存せず、しかも手紙以外は署名のみであることは、法然自身が文筆に長じた学匠ではなく、勝れた学識のある念佛行者であったことを、法然研究には先づ第一に知るべきことである。

したがって、法然に受法した門人が自身の学解によつて随自に教えを理解したために、法然の門下は分派するに至った。そして、その分派はいずれも自流こそ法然の嫡流を自負しているために、自流の考えに都合良きように、法

然の語録を増曠改変したらしく、『三部經大意』『法然聖人御說法事』にその例が見られ、また、法然の語録を最初に収集したものとして重視される醍醐本『法然上人伝記』の中にも、隆寛の説と思われるものが、法然の法語として収められているから、鎌倉時代の古写本であるという理由のみによって、法然の真説を記したものであると輕々しく定めることはできない。今後、法然の語録のおおのについて異本の研究が必要であることについて論述した。

第一編 法然浄土教形成の先駆

第一章 善導釈書の流伝と南都北嶺の善導観

第二章 念佛の数量信仰

第三章 末法思想

第四章 法然の往生要集観

以上の四章に分けて論述した。法然浄土教形成の先駆は、いうまでもなく、佛教の初伝以来、南都、叡山を中心として次第に発展して来た浄土教であることは言をまたないが、その中で、直接法然浄土教の形成に深い関係をもつもの、四点をとりあげて、それぞれ歴史的思想史的展開を論じ、法然の『往生要集』観によって、法然の念佛思想の独自性を示そうとするのである。

第一章 善導釈書の流伝と南都北嶺の善導観

善導の釈書は法然によって初めて取りあげられたものでなく、法然以前に現われた天台浄土教家、南都浄土教家にて既に取りあげられているが、法然と異なった見方をしている。

正倉院文書、入唐僧の請来目録によると、平安時代初頭には既に善導の代表的著述である五部九卷は伝来していたが、これに初めて注目したものは源信の『往生要集』と著者不明の『西方懺悔法』（述作年次不詳）である。『西方懺悔法』は『往生礼讃』に説く懺悔行儀の文を改変して用い、『往生要集』は『往生礼讃』、『観念法門』、『観経疏』等の文を随自引用して往生業の解明に資している。この引用文の全文を注出して、原文と比較したが、引用文は必ずしも善導の意趣の通り引用したとはいえず、善導の所明と異なるところもある。

その中、『往生礼讃』と『観念法門』とは比較的に忠実に原文を引用しているが、『観経疏』のみは異なり、意味を取った取意の文として引用している。ことに『観経疏』散善義に関して、良忠は、「源信は散善義を見ず」といって、「散善義不見説」ととなえ、これが現今の佛教学会の定説となっている。しかるにその引用文の内容より見るに「散善義」を見ることなくしては記述することの出来ぬ文であり、また、法然の『往生大要抄』には源信は『観経疏』散善義によって念佛を説くといっているから源信は『観経疏』散善義は見ているとすべきであろう。たゞ『往生要集』述作の時には座右になきたために、過去の記憶によって記載したために『観経疏』の引用文のみは取意の文となったと考えるのである。したがって源信の「散善義不見説」はあらためらるべきものと思う。

源信以後、叡山浄土教家で善導の釈書を重視した人は見ることができないが、南都浄土教家にては、永観、珍海、実範等はさかんに善導の釈書を引用して浄土往生を説いている。永観の『往生十因』では『往生礼讃』二例、『観念法門』二例、『観経疏』一例が引用され、珍海の『決定往生集』では『往生礼讃』二例、『観念法門』八例、『観経疏』三例が引用され、さらに『安養抄』『念佛式』（実範）及び『安養集』の引用例を出した。これによって、善導の釈書は叡山浄土教家よりも南都浄土教家の方が重要視していることが知られる。南都の浄土教家は善導をもって観念（想念・保念）と称名の双修を説き本願を重ずる祖師としているが、本願に対する理解が法然と異なる。それで、

法然がもつて浄土開宗の依り処としたとされる「一心専念弥陀名号」の文に対する永観珍海の釈義を出して、法然の理解との相違を示した。

そして、法然は晩年、南都北嶺より念佛禁止を訴えられたが、南都佛教に因縁の薄い法然がなぜ念佛禁止を訴えられたかに関して、現在まで諸学匠の見解の中にあまり明確な答えが出されていない。これは、おそらく善導浄土教をあまり重視していない叡山天台宗の僧、法然が、南都浄土教家の考えを無視して、本願念佛一行のみの善導をとりあげて、「偏依善導」といって、浄土宗を開創したことに対する非難攻撃であらうと思われる。『興福寺衰状』が法然の善導に対する理解の誤りを指摘して難詰していることは注目すべきことである。

第二章 念佛の数量信仰

念佛の数量信仰を説いた初めの人は、中国の道綽であるが、日本の源信は『往生要集』において、道綽は『阿弥陀經』の一七日念佛説によつて、百万遍を検得したといい、良忠またこの説を踏襲しているが、道綽の伝記を見ると念佛の数量信仰は説いているが、念佛百万遍説は見る事ができない。念佛百万遍の業によつて、浄土往生を説いた人は迦才が初めのものである。道綽、迦才の念佛百万遍信仰が日本に伝わり、源信以後、多くの人が百万遍念佛を行じたことが、各種の往生伝に見られる。

この百万遍念佛は一人が十日ほどかゝつて念佛一百万の数を満するのであつて、苦行に等しい行である。藤原兼実の『玉葉』によると兼実は数回百万遍念佛を行じたことが知られる。しかし、この苦行に類する百万遍念佛を一人が成満することは容易なことではないので、源信作と伝える『念佛自行問答』に説く功德の融通信仰によつて、数人乃至は十数人の唱える念佛の總計をもつて、百万なる数をかぞえ、一即多の相即の理論によつて、百万遍念佛

の功德を互いに融通する合唱形式の百万遍念佛が生れた。法然の三回忌追修法要が真如堂にて融通念佛によって行なわれたと記されているが、これは百万遍念佛を修したのであらう。

かゝる念佛の数量信仰、百万遍念佛信仰は唱える念佛に真言陀羅尼と同じように、多くの功德があると信ずる信仰であつて、数多く唱えることによって多大の功德を得ようという功德積重主義の信仰である。法然はかゝる念佛に對して、念佛は阿弥陀佛が本願に誓われた浄土往生の業なりとして、新しい意味と価値を与え、數量の多少よりも一生涯継続する念佛を説くのであつて、しかも、それには三心を具せねばならぬといつて、念佛の価値觀を変え、あたらしい意味を与えた。

第三章 末法思想

中国において『大集經』、『法滅尽經』等の翻譯と、これにあい前後して行なわれた北周武帝の破佛は当時の佛教界に大きな影響を与え、末法到来の思想を生み、これを基盤思想として、信行の三階佛法と道綽の浄土教が興つている。中国において末法思想を説いた初めは南岳慧思の『立誓願文』とされているが、慧思の時代および『立誓願文』の内容より考えるに、全文慧思の真撰という説もあるが、末法に関する記事は後世の竄入でないかと考えられる。道綽は末法思想によつて釈迦一代の佛教を分別して聖道門と浄土門に分ち、浄土門をもつて末法今時相應の教えとして、末法造惡の凡夫の浄土門に歸入すべきことをすすめてゐる。この道綽の聖浄二門の区分は日本の法然に受け入られて、浄土宗の教相判釈となつた。

日本においては藤原貴族の政治權力の弛緩とそれにとまなう武士の勃興および叡山、南都の佛教々団の横暴は、社会の指導階層の間に末法到来の思想を生み出した。日本の中世社会は社会の諸現象を佛教思想によつて解釈し

た時代であつて、社会が佛教化した時代といわれている。それで政治權力の衰退にともなう社会困乱は末法時代に入つた証拠であると解された。元来、末法思想なるものは佛教衰退の歴史観であるにかゝらず、歴史的事実を示すものとして受けとられて、永承七年（一〇五二）をもつて末法第一年とすることゝ説も生れたのである。

かゝる末法思想の流行は、末法時代に相応する法然の浄土教を生み、栄西の臨済禅、日蓮の唱題成佛説を生誕させ、道元の末法思想を方便とする曹洞禅を成立さした。

さらに、末法思想によつて示された平安末期の社会騒乱は従来の天台真言教学が説いた煩惱即菩提、娑婆即寂光土という安易な現実肯定の佛教思想をその根底から覆へたのである。この末法としての現実社会の騒乱を直視して、現実直証の新佛教創造の先駆となり、鎌倉新佛教創設の原動力となつたのが法然浄土教である。かゝる意味において、末法思想は法然浄土教形成の基盤思想として重視すべきものである。

第四章 法然の『往生要集』観

法然の浄土教形成の母体となつたものは源信の『往生要集』であることはいうまでもない。法然には『往生要集』の釈書として石井編『法然上人全集』には四種、『漢語燈録』（浄全所収）では三種、望月編『法然上人全集』には三種と真偽未詳に一種と都合四種が収録されている。そのうち『往生要集註要』のみは各集録ともに同じであり、多少の字句章句に具略は見られるが、ほとんど同本であるに對し、他のものは同名であつても内容に長短具畧の大きな異なりがあるので、これを比較對照して具畧をあきらかにした。對照したものは、(一)『往生要集釈』（石井法全所収、金沢文庫蔵本）、(二)『往生要集大綱』（漢語燈録、浄全所収）、(三)『往生要集畧料簡』（漢語燈録、浄全所収）、(四)『往生要集畧料簡』（石井法全所収）、(五)『往生要集料簡』（石井法全所収）、(六)『往生要集略料簡』（望月法全、真

偽未詳部所収)の六本であつて、第四章末尾の註記に続いて記載した。これによつて知られることは

(一) 望月編の『法然上人全集』に真偽未詳となつてゐる『往生要集畧料簡』は、石井編『法然上人全集』に収まる『往生要集畧料簡』と同本であつて、真撰とすべきものであること。

(二) 『往生要集大構』(漢語燈録、淨全所収)は『往生要集釈』(金沢文庫本)の前段部分の別行であること。

(三) 『往生要集略料簡』(漢語燈録、淨全所収)は『往生要集釈』(金沢文庫本)の広、略、要三料簡の中の「略料簡」以下を別行したものであること。

(四) 『略料簡』(石井法全所収)は『往生要集釈』(金沢文庫本)の広、略、要三料簡の中の畧料簡の一部分のみを別行したものであること。

(五) 『往生要集料簡』(石井法全所収)は右と同様に『往生要集釈』(金沢文庫本)の畧料簡以下を右の『略料簡』(石井法全所収)よりさらに長く別行したものであること。

(六) 六種の別行異本を対照して知られることは、『大綱』『畧料簡』(同名三本)『料簡』は、それぞれ別行しているが、全て『往生要集釈』(金沢文庫本)に収められることである。『往生要集釈』の所説と全然別個のことを説いたところは見られない。

而て、金沢文庫に現蔵する『往生要集釈』は二本あり、一本には「承久二年六月十二日」書写の奥書がある。この二本はほとんど同時代の写本と思われるものであるが、この承久二年(一二二〇)は法然滅八年にあたる。それで、法然の門人が法然の筆録(講述の筆録)した『往生要集釈』の中より肝要な『往生要集』の総決要行釈に関する文および初めの大綱をそれぞれ筆写して別本として伝持したために、現行のごとき、異本が出来上つたのであろう。したがつて、『往生要集註要』を合すと総計七種の別行本が見られるが、『往生要集註要』以外は全て『往生要集

『釈』に収められるから、別行本七種は『往生要集釈』と『往生要集註要』の二本にまとめられる。

そして、『往生要集釈』の釈義の中心は『往生要集』第五助念方法門の末尾に説く「総決要行釈」を細釈することによって、『往生要集』の正意は称名念佛にあることをあかさとするものであり、『往生要集註要』は第四正修念佛門の第四觀察門に説く帰命想、引接想、往生想に住して説く称念に対する釈義を中心として、称名念佛が『往生要集』の本意であることをあかして、両書ともに称名念佛が『往生要集』の肝心であることを説くところは同一である。

本書の述作年次について早期述作説と後期述作説とがあるが、早期述作説には疑義が多く、例せば觀念に堪えざるものに三想（帰命、引接、往生）による称念を説いているのを取りあげて、『往生要集』の正意とすることときえは実に何等かの意図をもった意図的な解釈と思われる。

よって筆者は早期述作説をとらず、法然の念佛に対して早くより「遍執の失」ありという批判に対して、『往生要集』の正意が称名念佛にありとして、批判の鋒をさけ、併せて『往生要集』の念佛より善導の念佛に帰入すべしとすゝめて、法然自身の説く念佛に帰入すべきことを説きあかしたものと思う。このことは、法然自身が『往生要集』の念佛より善導の本願念佛に転入したことを示すものである。したがって筆者は後期述作説をとり、六十才頃のものとする。『註要』と『要集釈』の前後に關しては『註要』の方が前のように考える。

第二編 法然自証の浄土教

法然の念佛は法然独自の自証による教説であつて、師に教を受けて、その教説を布衍したものでない。「偏依善導」と称しているが、善導の書物によって、従前の念佛に新しい意義と価値を与えて、念佛のみによる新教説を組

織したのである。これを左の八章に分けて論述し、その特質と真意の解明につとめる。

第一章 法然の自証について

第二章 法然の自証と半金色善導

第三章 選択本願念佛説の自証について

第四章 念佛と余行の問題

選択と統攝の理念。念佛と戒、雑行。念佛と懺悔。念佛と菩提心。

第五章 自証せる信について

第六章 凡夫について

第七章 還愚痴の凡夫

第八章 信受せる阿弥陀佛

第一章 法然の自証について

法然に善導が説く本願念佛の教えを伝えた人師は一人も存在しない。法然は叡山にて出家し、天台南都の諸学匠に教えをうけられたけれども、末法思想によって三学非器、乱想凡夫を自覚された法然を導く人は一人も無かった。よって、自身の得脱のために多くの経疏を読み、ついに善導が『観経疏』に説く本願念佛の教えを発見したのである。これは三学非器たる自身を救う教えを悟られたことを意味する。かゝる点より、本願念佛の教旨の自証というのである。かくして、開創された浄土宗は法然の自証と宗教経験がその基本理念となつていたのであって、天台真言の両宗、または南都六宗とは其の成立の基本理念を異にしているのである。この本願念佛の自証は全佛教の諸

法門の中より三学非器に相應する一行一法を選択することであつて、教法に機根を相應せしめる（教機相應）ものではなく、機によつて相應する教法を探求する（機教相應）ことである。ここに法然の浄土宗開創の持異性が見られる。

第二章 法然の自証と半金色善導

法然が善導の『観経疏』によつて本願念佛の教えを自証されたが、この本願念佛が善導の本意であり、阿弥陀佛の真意であつて相違ないことを証明する人師は一人も存在しない。これを弥陀、善導の本意であると強い確信を持たれるに至つたのは夢定中における半金色善導の来現である。こゝに法然浄土教形成の神秘的啓示的な性格を見出すことができる。

半金色善導来現のことは、法然の諸伝記に等しく記述するところであつて、来現について種々な意図意義を示している。かゝる神秘的な事象によつて新宗をひらいたのは、法然のみでなく、法相宗における無著と弥勒菩薩、天台宗における智顗と惠思、真言宗における『金剛頂経』の鉄塔相承等の説がある。この法然における半金色善導の来現は浄土宗の伝法にて重視されているばかりでなく、良忍（融通念佛宗）の弥陀直授説、時宗における一遍の熊野における神勅親授説を生んだと思われる。

第三章 選択本願念佛説の自証について

法然が四十三才、承安五年に回心して善導浄土教に帰入されたときをもつて、浄土開宗とするが、この回心が選択本願念佛の自証であることを論ずる。

法然の教説は一般に三重選択といわれ、そのまゝ法然の思想信仰の深化であるとされ、五十八才の『浄土三部經釈』に選択なる文字の出ていることによって、この頃またはそれ以降に選択なる思想が形成されたといわれ、また凡入報土説はこの頃になって現われたという説がある。従つて『選択集』述作の時をもつて、浄土開宗とすべき等の説があり、本宗学者の中にこれに讃同するが如き説があるに對し、法然の求道修学の過程において、「わが心に相應する法門ありや、わが身に堪えたる修行や」とあるといわれていることは、自身の心身に相應する教行の選択探求であるから、四十三才承安五年の回心は三重に選択された本願念佛の自証である。法然の自証とは選択本願念佛の自証である。この自証された選択本願念佛を理論的に、または組織的に先学の諸教説によつて論述されたのが、『浄土三部經釈』や『逆修説法』および『選択本願念佛集』であつて、その組織化の完成したもの、即ち、最もよく整備して論述されたものが『選択本願念佛集』である。したがつて、上記の思想發展史的に見る諸学者の考えに同意することは出来ない。

このことを『浄土三部經釈』『逆修説法』『選択集』等より三重選択に関する要文を列記對比して見れば表現、説明、言語の上において粗細の異なりはあるが、選捨選取して本願念佛の価値意義を教示される意趣に異なりの無いことが知られる。

ついで、選択本願念佛が第十八願所明の念佛であることは、善導の著作の中に散見されるが、明確に第十八願が三心具足の念佛たることを示した文は見られない。これを明確にしたのが法然である。

さらに、法然の『選択集』は善導著作の中より、本願念佛に関する要文のみを引用して念佛の意義と価値を論じて他をかえり見ない。それで、法然の『偏依善導』とは善導が説く本願念佛の一行のみに偏依することであることが知られる。

第四章 念佛と余行の問題

初めに法然の『選択集』第四「三輩念佛」篇において説く、廃立、助正、傍正の三義はたゞ經文解釈の一方法として取りあげるだけでなく、法然の当時ひろく行なわれていた各種の修行（雜行）および諸種の往生業を本願念佛を中心として組織付け、関係付ける理論であることをあかし、ついで念佛と戒、雜行との関係について諸種の批判および学説を紹介して、法然の戒と念佛に関する関係について論述した。

この戒と念佛との関係について批判する諸説のうち、その注目すべきものは「法然の行状（戒法伝持者、兼実郎の授戒）」と所説とに矛盾があるということ」である。念佛と戒に関して浄土宗学者の間には定説を見ず、種々な説が行なわれている。

(一) 戒は佛法の大地であるから、念佛双修を説くもの（捨世派、律院等の学匠の説）

(二) 戒を念佛の助業とする説（聖罔等の説）

(三) 念佛一致説、これに浄土布薩戒の説と最近の諸学者の説

等がある。これらの諸説について先づ考えるべきことは、法然は念佛教徒であると共に佛教徒であり、また社会人であるということである。したがって、社会人である限り社会慣習、社会道徳（孝養父母奉持師長等）は守るべきであり、佛教徒である以上戒法は遵守すべしということである。

念佛教徒は念佛をもって、この世に生きる最上のものとするから社会道徳や佛教の戒法を守る必要はないということとは出来ない。これらは必ず遵守すべきものである。しかし、この場合、社会道徳や戒法は念佛を行ずる人を助ける助業という地位に置かれる。法然は「分に随って」「堪えたらんにしたがって」といって、自己の能力に応じて遵守すべきことを説かれる。したがって法然の言行に矛盾があるという説には賛同することは出来ない。

また、念戒一致説のうち布薩戒は偽書によって説くものであるから、取りあげる要はないが、最近の諸学者の説く念戒一致説は、念佛信仰の終極に念戒一致を説くべきものであって、入信の初めには助業として説くべきである。念戒一致なれば、浄土宗の伝宗伝戒のいづれかが不要のものとなるばかりでなく、これは観念的な一致論であつて具体性の欠けた空論である。

かゝる、法然の言行に矛盾があるという説や念戒一致論は、親鸞的思考による法然観より出る説であつて、法然教徒は法然自体の考えによつて判断すべきである。

次に雑行との関係についても同様である。

往生業としては念佛以外の一切の行は雑業とされるが、佛教徒であり、社会人である点より雑行の修行は認めている。しかし、それによつて念佛が障害せられたときは廃捨されるのである。

次に念佛と懺悔について、善導、源信は懺悔を重んじているが、法然は懺悔滅罪の考えは往生の要にあらずといつて取りあげていない。そして称名滅罪説をとる。懺悔滅罪説は罪を自覚し自責するところに罪の消滅が説かれるに對し、称名滅罪は罪の自覚が救済の喜びに転じ、罪の自覚意識が消滅するところに称名滅罪が説かれる。法然は称名滅罪説であるにかかわらず、浄土宗列祖は各宗の例に准じて懺悔滅罪説を説き、これを念佛の助業としている。

次に念佛と菩提心について、『無量寿經』『觀經』を初めとして、曇鸞、道綽、善導、源信等の諸師はいづれも浄土往生には菩提心を必要としているにかゝらず、法然は菩提心を雑行に入れて廃捨している。これについて母尾の高弁は厳しく非難したが、法然は浄土に往生してから起す心としている。浄土宗列祖のうち聖光はこの菩提心に菩提心願と菩提心行の二を説き、法然の廃捨したものは菩提心行であるとし、菩提心願は必要であるといひ、また良忠は菩提心を総安心におさめ、浄土教徒も佛教徒であるから、三心の別安心に對して、佛教徒としての自覚か

ら総安心として菩提心を持つべきものとする。

第五章 自証せる信

信は一般大乘佛教にては佛教入門の初信とされ、修学によつて智慧をみがいて悟りに入るための初段階の心、または方便、手段のごとく考えられている。いわゆる「理解するために信ず」といわれる信である。法然のいう信はこれとは逆に「信ずるために理解する」という信であつて、理解修学をもつて信を得る手段、方便とするものである。しかのみならず、さらに理解修学を超えた単直仰信の信を説くところに法然の信心論がある。

法然は善導の三心釈を全面的に受け容れて「念佛行者必具の心」とする。そのうち至誠心は信心の基本であり、深心は念佛行者の信心の特質を示すものであり、廻向発願心は念佛行者のもつ信心の帰結と考えられる。そして、三心を具足する形態に智具、行具、仰信の三心が説かれ、決定往生の信について、法然の往生決定は未來完了の動詞として往生が用いられていて、過去完了でないことを説き、そして浄土教の難信易行なることをあかす。

第六章 凡夫について

凡夫とは聖者に対する言葉ではあるが、法然においては佛以外の一切の現実の人間を凡夫と称する。それは現実の人間が末法の五濁惡世に住するものであり、また煩惱をもつものであり、罪惡を背負つた人間であるからである。その煩惱とは無始無明、三毒煩惱とも呼ばれているが、佛教の究極目的である悟りに対して障害をなすものであつて、それが私であると主体的に自覺するところに存在する。そしてこの煩惱が現行するところに罪惡が形成され、それを主体的に自覺する（信機）ところに罪惡の凡夫という考えがある。

この主体的に自覚した罪惡と善導が説く要畧広の三懺悔において説く罪とは同じ性格のものである。そして、人間をして主体的に罪惡を自覺せしめるものは佛性であつて、法然は本来人間は佛性を有するものであるが、現実の人間においては佛性が煩惱によつて覆ひ隠されている凡夫とし、この点より煩惱具足の凡夫という。そしてこの煩惱によつて惡業を行ふところより現実の人間を罪惡の凡夫という、煩惱といい、罪惡といい、主体的に自覺することは佛性が本来存在するからである。即ち、法然は性善説的な凡夫觀を説く、これに對して法然門流の親鸞は性惡説的な凡夫觀を説くのである。

第七章 還愚痴の凡夫

還愚痴は法然の念佛信仰の極地であり、歸結であつて、永年に亘る念佛の実修と、平日の修學によつて証得されたものである。それは「年来習タル智恵ハ往生ノ為ニハ用ニモタ、ス、サレ共習タルカヒニ必ズ如此知タルハ無量事也」という言葉によつて知られるごとく、これは修學によつて往生を得ようとすることは不可能であるといふことを修學によつて知つたといふことである。このことは修學によつて修學を否定することであつて、修學によつて智恵をきわめることの限界を知つて、修學を放棄することである。法然のいう還愚痴、大愚痴者になるといふことは、凡庸なるものの無學、不學の境地をいうのではなく、智恵第一の法然が永年の修學と念佛の実修によつて得られた愚痴であつて、大乘菩薩道を百尺竿頭一步を進めたものであると考えられ、還愚の菩薩道とも名づけらるべきものである。

第八章 信受せる阿弥陀佛

法然に聖道門の教えを「今時難証」といつて捨てる理由の「理深解微」をあげている。したがって、聖道門は「理深解微」なるゆえに廃捨するが、浄土門は「理深解微」であつてよいことは考えられない。それで、法然は阿弥陀佛の覚体に関する形而上学的な論述はほとんど見ることができない。

法然は『逆修説法』等に佛身について二身、三身説を説き、道綽善導の説をうけて報身報土説を説いているが、この佛は法然にとりて信受せる佛であつて、思索觀念の対象とされる佛ではない。七宝莊嚴を極めた浄土にまします生身の佛として信受されたのである。このことは「人は西を背にすべからず」の法語、及び熊谷入道下向の物語りより伺うことができる。この信受する信とは、行具の三心である。智具の三心の上に受容される佛が法身佛であり、仰信の三心によって感得する佛が化身佛であるに對して、念佛行の実修によって得られる行具の三心によつて、受容される佛が報身である。即ち法然は学解によつて証得した三身の中の報身佛としての阿弥陀佛ではなく、行具の三心によつて信受される報身の阿弥陀佛である。

第三編 法然浄土教に対する批判の史的考察

法然の念佛一行往生説に對して、法然の生前中（五十二才頃）に既に「偏執の失あり」という批判が行なわれ、晩年になつて南都北嶺より厳しい難詰と迫害が行なわれた、法然滅後も念佛一行往生説に對する批判、非難が長く行なわれ、現代においても、種々の批判がなされているので、これを左の通り五章に分けて論述した。

第一章 法然の善導浄土教受容に對する批判

第二章 覚明房長西門流の専修念佛批判

第三章 禅宗徒の専修念佛批判

第四章 日蓮門流の専修念佛批判

第五章 浄土宗と真宗との論争

以上

第一章 法然の善導浄土教受容に対する批判

善導の著作は平安時代の初頭には既に全部伝来し、叡山天台宗にては源信がこれに注目し、奈良浄土教のうち、永観、珍海、実範等も善導の著作を随自引用して浄土往生を解説している。これらの人師の見た善導は戒法を守り、菩提心をおこして、観念と称名を双修する念佛者としている。しかるに法然は「偏依善導」といいながら本願念佛の一行のみを受容し、持戒、菩提心、観念等を雑行として廃捨している。

かゝる法然の教説に対して叡山天台宗徒の非難したところは、法然が持戒を不要とし、念佛以外の行をすべて雑行として廃捨したことに對する非難であつて、ことに法然の悪人往生説を曲解して、門下の中に悪をはばからざるもののあつたことに對する非難である。

これに對して南都よりの非難は『興福寺奏狀』および『摧邪輪』に見られるごとく、法然の善導浄土教理解に對する非難であつて、善導は観念と口称を尊び、また堂塔を修理し、諸佛菩薩を崇め、戒法嚴守の人師であるにかかわらず、法然は念佛の一行のみをとりあげて、他を雑行とすることは善導を誤らすものなりといい、ことに高弁の『摧邪輪』は菩提心を雑行に入れ、往生行には不要とするは善導を汚すものであり、また聖道門を群賊に喩えるのは善導の教説を誤つて理解するものなりといつて、法然の善導に對する理解を難詰している。

第二章 覚明房長西門流の専修念佛批判

長西は法然の門人である。しかるに法然滅後、覚瑜に師事したために、法然の廃捨した諸行も亦本願なりといつて、『無量寿経』の第二十願、善導の『観経疏』玄義分十四行偈に出づる「定散等回向速証無生身」の文、および法然の『無量寿経釈』にあかす三輩段の釈義等によつて、善導法然ともに諸行往生を説くといひ、専修念佛一行説は佛の大慈悲を狭少ならしむる失ありと説き、また、顕密の要行を雑行雑修に収めることは謗法罪であるといひて非難する。しかし、ここに注意すべきことは、法然をもつて念佛、諸行ともに往生業とする師としていることであつて、専修念佛一行を説くのは法然門下の中の一部のものの説としてのことである。しかし、長西の孫弟子と思われる導空になると『選択集』に対して疑義を出して批判している。

第三章 禅宗徒の専修念佛批判

末法思想に関連して一法一行に絶対的価値を認めることは、法然、栄西、道元ともに同じであるが、法然は佛の他力を説くに対して栄西、道元は自力の修道を説く点が大いに異なる。したがつて法然の念佛の教えはしばしば、禅宗より批判をうけているのである。栄西の『興禅護国論』には暗に法然の無戒念佛説を「文字言語の塊を遂うもの」と批判して、持戒修禅を「時」と「機」と「処」とに相応する法とし、道元は『正法眼蔵』において、末法を説く三時思想を方便の教えとし、また易行を説くは釈尊の真意に反するものといひ、念佛は蛙の声なりと批判して、逆に「只管打坐」の一法一行を説いた。

また無住は『沙石集』にて、念佛の教えは阿弥陀佛以外の佛菩薩を軽視するものであり、また念佛一行のみを説いて余行の往生を許さぬは善導の教えに違背し、阿弥陀佛を讃ずるようであるが、実は謗法をなすものといひて非

難している。

足利初期にあらわれた夢窓疎石は『夢中間答』にて、浄土宗の教えに対して、大乘佛教には難易二道なく、念佛は了義大乘ではないといって非難した。これに対し智演は『夢中松風論』を著わし反論し、浄土教は頓教中の頓教であり、大乘の極要なりという。この智演の反論に対して疎石はさらに『谷響集』を出して答えた。智演はさらに重ねて『谷響集』の説を反論している。

しかし、同時代の得勝は法然門流の浄土教の盛行に対して、「己心浄土唯心弥陀」を説き、徳川時代に入りて白隠もまた、念佛を批判している。

第四章 日蓮門流の専修念佛批判

日蓮は折伏すべき第一のものとして、法然の念佛をとりあげ、無間地獄の業とし、法然の『選択集』は実大乘の『法華経』を「今時難証」の教えとするは謗法罪を犯すものという。しかし、日蓮の教説の構格を見ると、法然と同じ思考形態をもっているのであって、法然が出でなければ、凡らく日蓮の唱題成佛説は生れなかったであろうといわれるほど、考え方が類似している。織豊時代に入りて安土宗論、徳川初期には武城問答が行なわれ、さらに現今の創価学会も念佛批判をしているが、いずれも日蓮の考えを出るものではない。

第五章 浄土宗と真宗との論争

浄土宗と真宗との論争は、上記の禅、日蓮との論争とは異なり、法然門下における聖光と親鸞との地位の主従、嫡流傍流の争いである。徳川時代においては主として浄土宗側より親鸞の教説を批判しているのであって『親鸞邪

義決』『茶店問答』『正邪不可会弁』の三書の説を中心に論争が行なわれたのである。浄土宗より非難するところは主として、親鸞の教説は邪義一念義の流れをくむものであり、肉食妻帯は法然の精神を汚すものであるということにある。これに対して、真宗より多くの反論書が著わされている。

さらに教団史の上で注目すべきものは「宗名争い」である。これは従来、真宗にて一定の宗名なきために、浄土真宗の公称を幕府に請願したに初まる。これに対して浄土宗は増上寺を中心に、教団をあげて、その阻止にあたり、両教団ともに幕府に陳状をくり返し、ついに宗名の改称は一万日のお預けとなったのである。

明治以降になって、親鸞の教説に対して、浄土宗の望月信亨博士は『畧述浄土教理史』において種々批判し、野々村直太郎氏は『浄土教批判』において、浄土教の教説そのものを批判したが、戦後になって、親鸞の教説に対する考え方が変わり、「日本の庶民浄土教の完成者をもって親鸞」とし、法然をもってその過渡的存在と見るようになり、法然の教説に対して、矛盾があるとか、真の庶民の宗教でないとか、大乘佛教の理念が欠除している等の批判が見られ、また教団史の面より法然四十三才の浄土開宗について、種々の批判が行なわれた。これに対して、反論を加えて蒙をひらくことにつとめた。

さらに、親鸞の『教行信証』に対する批判は未だ見られず、ことにその「後序」に記される、親鸞の流罪、『選択集』の真筆相伝、法然に対して源空という親鸞の呼び方等について疑義が見られるところより、現代における親鸞批判として末尾に記した。

附録 法然の語録述作年次に関する諸説

法然は自から筆を取って記述されたものは少なく、ほとんどが門人の記録であるために二、三のものを除いてそ

の述作年次が明確でない。それで、編纂の年代順によって、醍醐本『法然上人伝記』、『黒谷上人語燈録』の価値とそれに対する諸学者の見解を記し、併せて、『黒谷上人語燈録』の集録順によって、『漢語燈録』、『和語燈録』、真偽未詳の各部に収まる語録の一々について、先学の研究成果を記して、後学の資とする。なお、参考のために目次を付記する。

目次

緒論 法然浄土教研究の諸問題

一、研究資料について

二、真筆について

三、異本について

1. 『三部経大意』について

2. 醍醐本『法然上人伝記』所収の法語について

四、今後の問題

第一編 法然浄土教形成の先駆

第一章 善導釈書の流伝と南都北嶺の善導観

第一節 善導釈書の伝来

第二節 『西方懺悔法』について

第三節 『往生要集』における善導釈書

1. 『往生礼讃』の引例

2. 『観念法門』の引例

3. 『観経疏』の引例

4. 『往生礼讃』と『観念法門』の引用について

5. 『観経疏』の引用について、附、散善義

不見説について

6. 称名念佛への傾斜

第四節 永観の著作における善導釈書

1. 『往生十因』『往生講式』における引例

2. 『往生十因』の引用について

3. 「一心專念」の文に対する釈義

第五節 珍海の著作における善導釈書

1. 『決定往生集』における引例

2. 『決定往生集』の引用について

3. 「一心專念」の文に対する釈義

第六節 『安養抄』及び他の章疏における善導釈書

書

第七節 南都北嶺の善導觀

第二章 念佛の数量信仰

第一節 念佛の数量信仰の創唱

第二節 百万遍念佛の提唱

第三節 日本における数量信仰

第三章 末法思想

第一節 經典に説かれる法滅思想

第二節 中国における末法思想

1. 惠思の『立誓願文』について

2. 道綽の末法思想

第三節 日本の末法思想

1. 『末法燈明記』について

2. 社会の困乱と末法思想

第四章 法然の『往生要集』觀

第一節 『往生要集』と法然

第二節 法然の『往生要集』に関する四種釈書

1. 『往生要集註要』の組織と内容

2. 『往生要集釈』の組織と内容

3. 『往生要集大綱』、同『料簡』、同『畧料簡』の内容

簡』の内容

4. 四種釈書の關係

第三節 早期述作説に対する疑義

1. 述作事情についての疑義

2. 選択なる考えの見られること

3. 末尾に説く『觀經疏』について

第四節 『往生要集』の釈書述作の意図

1. 述作の意図

2. 述作年次と異本の成立について

附(一)六種異本の全文対校表

(二) 総決要行釈に関する前文と後文の対校表

第二編 法然自証の浄土教

第一章 法然の自証

第一節 法然浄土教の自証的性格

第二節 自証の無師独悟的性格

第三節 自証の過程と立場

第四節 自証による選択理念の形成

第五節 自証回心の立場

第二章 法然の自証と半金色善導

第一節 半金色善導来現の意義

第二節 諸伝記に見える来現とその意図

第三節 半金色善導来現説の示すもの

第四節 新義創唱における神秘性

第五節 半金色の意味するもの

第六節 夢定中来現説の影響

第七節 相伝の偈文について

第三章 選択本願念佛説の自証について

第一節 先学の諸説とその批判

第二節 回心と三重選択

第三節 自証せる念佛の組織化

第四節 第十八念佛往生願の確立

第五節 『選択集』における善導教説の受容

第四章 念佛と余行の問題

第一節 選択と統摂の理念

1. 法然の行状と選択の理念

2. 廃助傍三義の意義

3. 廃立と選択

4. 助正、傍正

第二節 念佛と雑行・戒の問題

1. 問題点

2. 雑行・戒に対する考え

3. 戒法廃捨の意義

第三節 念佛と懺悔

1. 善導の懺悔

2. 源信 永観の懺悔と法然

3. 法然の説く罪

4. 法然の称名懺悔

第四節 念佛と菩提心

1. 經説と列祖の菩提心

2. 法然の菩提心觀

3. 聖光、良忠の菩提心説

第五章 自証せる信について

第一節 善導の三心釈の受容

第二節 三心相互の關係について

第三節 三心の基本、中心、帰結

第四節 三心具足の形態

第五節 信と行の關係

第六節 決定往生の信について

第七節 難信易行について

第六章 凡夫について

第一節 浄土教の立場

第二節 凡夫の意義

第三節 末法の凡夫

第四節 煩惱具足の凡夫

第五節 罪惡の凡夫

第六節 罪惡の主體的自覺と懺悔

第七節 罪惡の主體的自覺と佛性

第七章 還愚痴の凡夫

第一節 還愚痴の意義

第二節 現実の自証

第三節 知恵と還愚痴

第四節 菩薩道と還愚痴

第八章 信受せる阿弥陀佛

第一節 法然の三身説

第二節 受容した報身阿弥陀佛

第三節 信の対象とされる佛

第四節 行具の三心による佛

第三編 法然浄土教に対する批判の史的考察

第一章 法然の善導浄土教受容に対する批判

第一節 偏依善導の意義

第二節 天台宗比叡の山徒よりの非難

第三節 南都教団よりの非難

第二章 覚明房長西門流の専修念佛批判

第一節 法然門下における覚明房長西の地位

第二節 長西門流における善導釈書

第三節 諸行本願義提唱の典拠

第四節 長西門流の一向専修批判

第五節 『選択集述疑』の批判

第三章 禅徒の専修念佛批判

第一節 禅と浄土教の交流

第二節 栄西の浄土教批判

第三節 道元の浄土教批判

第四節 無住の批判と覚心の合行説

第五節 夢窓疎石と智演の論争

第六節 拔隊得勝の浄土観 (附白隠)

第四章 日蓮門流の専修念佛批判

第一節 日蓮の態度

第二節 日蓮の末法思想

第三節 日蓮の念佛批判

第四節 法然浄土教との類似性

第五節 浄土宗徒との宗論

第五章 浄土宗と真宗との論争

第一節 徳川時代における論争

1. 『親鸞邪義訣』に関するもの

2. 『茶店問答』に関するもの

3. 『正邪不可会弁』に関するもの

4. 宗名争い

第二節 現代における法然浄土教に対する批判

1. 戦前における批判

2. 戦後における批判

(一) 教理面よりの批判

イ、念佛と持戒、難行説に対する批判

ロ、三万六万の念佛修行に対する批判

ハ、三昧発得に対する批判

ニ、善人悪人往生説に対する批判

ホ、大乘佛教理念の欠除という批判

(二) 教団史の面よりの批判

第四節 『教行信証文類』後序に対する私見

1. 流罪について
2. 『選択集』真筆書写について

附録

法然の語録述作年次に関する諸説

一、『浄土依憑経論章疏目録』

二、醍醐本『法然上人伝記』

三、『西方指南抄』

四、『黒谷上人語燈録』

五、語録の二々について

1. 『漢語燈録』
2. 『和語燈録』
3. 真偽未詳

以上